旧版です。最新の投稿規程についてはHTML版をご覧下さい

『文化人類学』執筆細則（2019年12月増補改訂版）

1．　原稿の作成とファイルネームのつけ方

投稿原稿は原則として学会ホームページにある所定のテンプレートを用いて作成し、ホームページの「投稿フォーム」から投稿すること。

査読上の便宜のため、原稿ファイルにつける「ファイル名」は次の形式に従うこと。

1）タイトルをもとに5～8文字程度の語句を考える。特集序論の場合は特集名をもとに考える。冒頭付近の語句または特徴的な語句を用い、微細なアレンジは可。中黒等の記号類は省略。投稿原稿を素早く見分けることだけが目的なので意味不明の語句になっても構わない。

2）選んだ語句の前に投稿区分表記記号として「アルファベット＋アンダーバー」をつける。以下、用いるべき区分表記記号を示すとともに、『文化人類学』83巻掲載原稿をもとにした仮の作成例を示す（ただし書評論文は架空の例）。特集原稿の場合も当該原稿の属する投稿区分に従うこと。

【作例】

原著論文：A_　例：「A_希望の消費」「A_シティズンシップ再考」「A_ウガンダ牧畜民」「A_人街インフラ」「A_先輩が使って」

萌芽論文：B_　例：「B_ニーズ共有接近法」

展望論文：C_　例：「C_リテラシー」

書評論文：D_　例：「D_仮想通貨の民族誌」「D_家族論の新展開」

特集序論：IN_　例：「IN_現代消費文化」「IN_東アフリカ」

レビュー：R_　例：「R_オランダ流」「R_新版文化人類学」

フォーラム：F_　例：「F_世界海外華人」「F_共同研究のあり方」

2．構成

原著論文　題名、日本語要旨、キーワード、目次、本文、注、参照文献（英文要旨は12.と13.を参照）

萌芽論文　題名、キーワード、目次、本文、注、参照文献（日本語要旨は不要、英文要旨は12.と13.を参照）

展望論文　題名、キーワード、目次、本文、注、参照文献（日本語要旨は不要、英文要旨は12.と13.を参照）

特集序論　題名、本文、注、参照文献、英文要旨（日本語要旨は不要、英文要旨は12.と13.を参照）

書評論文　書評論文自体の論題、主として言及する複数の文献名（編・著者名、書名、副題、出版社、刊行年、その他任意で必要な情報）、本文、注、参照文献（日本語要旨、英文要旨とも不要）

レビュー　「書評」の場合は、編・著者名、書名、副題、版数、出版地、出版社、刊行年、総頁数、定価を明示。「映像・展示評」の場合は、書評のケースを参考に主要な情報を掲載する（細かい情報については注に回す）。

フォーラム　題名、本文、注、参照文献

3．キーワードと日本語要旨

原著論文、萌芽論文、展望論文の場合は5つ程度の日本語のキーワードをテンプレートの所定の位置に記入する。

原著論文の場合のみ、それに加えて400～600字の日本語要旨も作成し、テンプレートの所定の位置に記入する。

書評論文、レビュー、フォーラムの場合はキーワードも日本語要旨も不要。

4．英語表題、ローマ字氏名、英語キーワード

これらは投稿時には不要。掲載決定後、英文要旨のテンプレートに記入すること（12.を参照）。

5．章立て

章はⅠ、Ⅱ……、節は全角で1、2……とする。なお、数字の後にピリオド等はつけないこと。

詳細はテンプレート見本の指示に従うこと。

6．本文

①文字および句読点

本文および注の日本語文は全角文字を原則とし、また句点として「。」、読点として「、」を用いる。日本語以外の語句を挿入する場合は、当該言語の慣習を考慮しつつ、適切な方法を選ぶ。

なお、下記の「**執筆細則付則2――「参照文献」における文献表記の方法**」にある通り、論文末の「参照文献」では本文とは異なって、日本語文献でも「。」「、」を用いず、英語文献等と同様に半角のコンマ「,」とピリオド「.」を用いる。

②数字と年号の表記

文中の数字は、原則として算用数字「1、2、3……」を用いる。その場合、一桁の場合は全角、二桁以上の場合は半角、四桁の数字は、三桁目に半角コンマを入れること（年号を除く）。万以上の数字には、

万、億、兆などを用いる。

漢数字「一、二、三……」を用いるのは、「第一歩」「一生」など漢数字を使わないと不自然な場合、「十数人」など概数を表現する場合に限る。

年号は原則として西暦とし、それ以外の暦法を使用する場合は西暦をカッコ内に付記する。

③文章を引用する場合

カギカッコの中が文章の場合、最後の句点は取り去る（カッコ内に二つ以上の文がある場合、最後だけ取り去る）。

【例】×「もうダメだ。悪魔にとりつかれている。」という言明は、何を実現しているのだろうか。

○「もうダメだ。悪魔にとりつかれている」という言明は、何を実現しているのだろうか。

引用する文章が長い場合は、地の文との区別を明確にするため独立した段落にするのが望ましい。引用文による段落の左側は全角１文字分を字下げした形とし、また段落の前後を１行開けること。引用を示すカギカッコは不要。なお、字下げはWord文書のインデントマーカーを使う形が望ましい（テンプレート中の説明を参照のこと）。

④引用文の中にカギカッコがある場合

引用する語句の中にカギカッコが含まれている場合は、被引用語句内のカギカッコをそのままカッコに入れて、「……「……」……」の形にする（論文末の「参照文献」でも同様）。被引用語句が『 』を含む場合は「……『……』……」となる。

付言すれば、被引用語句内のカギカッコを全て二重カギに変換するルールについては、読者に誤解を引き起こしうる（本来「 」だったのか『 』だったのかが不明になる）、三重のカッコに合理的に対応できない等、様々なデメリットがあるため、これを採用しないこととする。

⑤その他のカッコ等の使い方

語句を強調する目的では、「 」のほか、〈 〉《 》などのカッコ、また、引用符“ ”も用いることができる。

他方［ ］は、引用表示の目的で用いられるほか、言い換え等の目的で語句を付加する場合にも用いられる。亀甲カッコ〔 〕は語句を補う目的で用いられることが多い。

⑥ダッシュ（タイトルおよび文中）

一般に、日本語文献の主タイトルと副タイトルを連結する場合は二倍ダッシュ「――」（全角２文字分）を用いる。文中に語句を挿入したりするためにダッシュを使う場合も、同様にして常に二倍ダッシュを用いる。

⑦省略記号

本文中で省略記号として三点リーダーを使う場合は、常に２文字分（……）使うこと。引用文内で中略する場合は、亀甲カッコを用いて、〔……〕（内部に三点リーダー２つ）とするか、〔中略〕とする。

７．文献引用

文献引用表示は、基本的には、［馬淵 1935：９］のような形で、本文中および注の内部で行う。本執筆細則末尾の「**執筆細則付則１――文中における引用表示の方法**」で、スペースを節約しつつ引用表示を行うための一連のルールが具体例とともに示してあるので、必ずそちらを一読し、参考にすること。

なお、文献引用すべきケースは、文章等の直接引用、具体的な記述内容（データ等）の間接引用に限られない。原稿の完成後、振り返ってみて、原稿作成の過程で重要な影響（アイデアや発想のレベルを含め）を与えたのに言及されていない文献がある場合、適切な場所に注をつけるなどしてその文献に必ず言及すること。誠実な研究上の営みとしてこれは不可欠のことである（それを「隠す」ことは著者自身の独自性を過剰に「演出」することである）。

８．注

論文末、「参照文献」の前に掲載される。テンプレート見本の指示に従って記入すること。

９．写真・図・表

写真は著作権・肖像権に留意し、許諾が必要な場合は投稿前に取得すること。

投稿原稿における写真・図・表は、キャプション入りの画像ファイルの形で本文に貼り付ける（図のキャプションは図の下に、表のキャプションは表の上につける）。査読過程においては画像ファイルは圧縮された形でやり取りされる。これらの点については、テンプレート見本に詳しい説明があるのでそちらを参照のこと。

写真・図・表のオリジナルファイルは手元に保存しておき、掲載決定後、入稿時に文字原稿とともに印刷用として提出する。

10．特殊文字、外字

Wordの初期設定で含まれていない特殊文字・外字を使用する場合は、フォントを指定し、当該文字の見本のPDFまたは写真を添付すること。

11．参照文献

①「参照文献」に掲載すべきもの

論文末に置かれる文献リストでは、本文と注の中で、上記７．の［馬淵 1935：９］のような形で引用した文献を漏れなく記載する。

文献は、原則として、五十音順に並べる文献とアルファベット順に並べる文献に分け、この順序で記載していくこと。

②見出し

文献リストの見出しは必ず「参照文献」とすること(「参考文献」、「引用文献」等は不可)。

③文献表記の詳細について

「参照文献」における文献表記法の詳細については、必ず本執筆細則末尾にある「**執筆細則付則２――「参照文献」における文献表記の方法**」を参照し、原則としてそのルールに従うこと。

12. 短文英文要旨(原著論文、萌芽論文、展望論文、特集序論)

投稿時・再投稿時における著者の負担を減らすため、投稿時の英文要旨作成を一切省いている関係上、原著論文、萌芽論文、展望論文、特集序論については、掲載決定後、長短二種類の英文要旨を提出することが必要になる。迅速な提出が求められるので、事前に念頭に置いておくことが望まれる。

短文の英文要旨は、上記４種類の原稿について、投稿区分にかかわらず、150語程度で作成する。これは『文化人類学』掲載論文の末尾に置かれるとともに、J-Stageの英文要旨欄に掲示されることになる。掲載決定の通知後、編集事務の指示に従って提出すること。

英文要旨作成の際はテンプレートを利用すること。テンプレートでは、論文の英語表題、氏名のローマ字表記、５つの英語キーワードの記入も必要となる。

要旨は原則としてそのまま『文化人類学』に掲載されるので、信頼性のある業者による標準レベルの校閲、または英語を母語とする学術的専門家による校閲を受けること(費用は自己負担となる)。

なお、*JRCA*がアメリカ英語のスタイルを採用しているため、そちらに合わせ、長短の英文要旨はタイトル・要旨本文ともアメリカ英語のスタイルで作成するのが望ましい。

13. 長文英文要旨(原著論文、萌芽論文、展望論文、特集序論)

掲載決定後１ヶ月以内を目安に、長文英文要旨を作成のこと。これは*Japanese Review of Cultural Anthropology*(*JRCA*)に掲載されるもので、以下の形式に則った、日本語論文の“英語要約版”という性格のものになる。

１)語数は、原著論文は1500～2000語程度、萌芽論文および展望論文は1000～1500語程度、特集序論は500～1500語程度。

２)要旨本文はいくつかの章に分け、タイトルをつけることを推奨する。注および写真・図・表を含めることも可。

３)要旨内で言及している文献はREFERENCESにまとめる。

４)作成に当たっては所定のテンプレートを利用すること。

５)論文の英語表題、氏名のローマ字表記、および５つの英語キーワードについては、必ず短文英文要旨と同一のものを用いる。

この“英語要約版”は*JRCA*編集委員会によって扱われるもので、提出の段階でそのまま掲載可能な英文であることが求められる。信頼性のある業者による標準レベルの校閲、または英語を母語とする学術的専門家による校閲を受けること(費用は自己負担)。

14. 複製・公開の権利

本誌に掲載されたすべての原稿を複製・公開し、公衆に発信する権利は、編集委員会にあるものとする。

(2019年12月14日理事会承認)

執筆細則付則１――文中における引用表示の方法

１. 基本ルール

文献引用表示は、本文中および注の内部で行う。文中の適当な箇所に全角大カッコ[ ]を挿入し、下の例にある通り〈著者姓＋半角アケ＋刊行年＋全角コロン(：)＋ページ〉の形式で書く(アルファベット表記の文献の場合も区切りのコロンは全角を使用)。複数ページの場合は始まりと終わりを半角ダッシュ(–)でつなぐ。なお、３番目の例にある通り、開始ページと終了ページの間で数字の重複がある場合、後者の中の重複部分を省略して表記を短くすることができる。

【例】[馬淵 1935：９]
[Gupta & Ferguson 1997：ii–iii]
[田中・松田編 2006：18–９]

同一文献から何度も引用する場合も、ibid.、上掲書などとせず、上記方式の表記を繰り返すこと。

２名以上の著者による文献に何度も言及する場合、もし他の文献との混同の余地がなければ、２回目以降の引用表示においては、「ほか」(日本語文献の場合)、「et al」(英語文献の場合)等を用いて短くすることができる。

【例】[セリグマン，ウォーカー & ローゼンハン 2016](初めての引用)
[セリグマンほか 2016](二度目以降)

2．複数の箇所を参照する場合、また、同一文献を集中的に引用する場合

下の最初の例にもある通り、同一文献中の複数の箇所を参照する場合は全角コンマ（,）でつなぐ。二番目の例にある通り、同一著者等の複数の文献は全角コンマ（,）のあと刊行年以下をつなげることができる。著者等が異なる複数の文献は全角セミコロン（;）のあとに続ける。

【例】［山口 1975：143-51，182-３］
［山口 1975：123，2007：55；サーリンズ 1993：125］

なお、同一文献から多数の引用がある場合など、本文中または注において、例えば「以下、カッコ内は同書のページを指す」といった断り書きをし、引用表示を簡略化することもできる。また複数の文献から多数の引用がある場合、記号を用いるなど一定のルールを設けたうえで引用表示を簡略化することも可能。この場合、混同が生じないよう十分に注意すること。

3．本文中の著者・著作への言及を利用する場合

文中で著者ないし著作に直接言及する場合、以下のように、その語句を用いた引用表示をすることでスペースを節約してもよい。ただしアルファベット表記の文献で、３番目の例のように、文中で著者名をカタカナで言及している場合は、この方法は使えない。

【例】この点に関しては、山口［1975：123］が論じている通り〔……〕。
サーリンズの著作［1993］によれば〔……〕。
ジェルは〔……〕と論じる［Gell 1998：84］。

付言すれば、『文化人類学』では本文中で外国人著者をカタカナで言及することが慣例化している。これは研究者名と被調査者の人名（カタカナで表記されることが多い）との間に落差を設けない、人類学らしい姿勢の反映であるとも解釈できる。これを慣例として認めたうえで、しかし、『文化人類学』の掲載論文は多様な性格のものでありうるので、著者の選択によって本文中で外国人著者を一貫してローマ字で言及することも可とする。

4．著作者表記をめぐるルール

文献によっては著作者が不明ないし不明瞭な場合がある。その場合、著作者名に類する名称（発行者名、制作団体名、アーカイブ名等）が存在する場合には、その名称を用いること。

なお、文献によっては［馬淵 1935：９］型の表記をせず（したがって「参照文献」に含めず）、文中または注の中で引用表示することも可能である。

以上は「参照文献」における表記と重なる問題であるので、付則２の該当部分（１.⑥）、また同じ付則２の４.のフローチャートを参照のこと。

5．刊行年表記をめぐるルール

初版刊行年や翻訳書の原書刊行年を書き添えたい場合は、半角アケして半角カッコに入れる。この場合、論文末の「参照文献」でも同様の表記が必要（なお、論文末で原書刊行年を付記し、引用表示の方はそれを省略することも可能）。

【例】［Malinowski 2014（1922）：18］
［サーリンズ 1993（1985）：199-200］
［Godelier 2011（2004）：200-１］

なお、以下のような様々なケースでは、刊行年の場所に該当する文字を入れる。

刊行年不明の場合　日本語表記では「日付不詳」、例えば英語では「n.d.」。

近刊や印刷中の場合　刊行予定日が決まっている場合は、刊行予定年を用い、書誌情報の末尾に、日本語表記では「近刊.」ないし「印刷中.」、例えば英語では「Forthcoming.」または「In press.」と追記する。刊行予定日が決まっていない場合は、日本語表記では「近刊」ないし「印刷中」、例えば英語では「Forthcoming」ないし「In press」を刊行年の代わりとして用いる（本文中でもそれらの文字を著者姓のあとに続ける形で引用する）。

6．参照の意図の付記

引用表示の全角大カッコの中には、「～を参照」、「～も参照」、「ただし～も参照」等、参照の意図を含む語句を入れることもできる。ラテン語の e.g.（＝exempli gratia,「例えば」）や cf.（＝confer,「比較せよ」）なども使用可（cf.は内容的差異にも注意しながら参照してほしい場合に使う）。

【例】［山口 1975：123-４，なお143-51も参照］
［e.g. Gupta & Ferguson 1997：ii］
［山口 2007：55；cf. サーリンズ 1993：125］

7．ページ指定以外の参照方法

コロン以降では、ページ指定以外の方法で位置を示すこともできる。そこで用いる語句は、当該文献の章構成等を参考に、著者が適切なものを選ぶこと。

【例】［サーリンズ 1993：第２章］

「参照文献」には、ウェブサイト、映像、写真など様々な媒体のものが含まれうる。書物以外の媒体の場合、資料の性質に合わせて適切な表記法を考え、言及したい箇所を示すこともできる。下記は付則２の１.⑥に例示されているオンライン映像で、参照部分を細かく指定したい場合の例。

【例】[Macfarlane 2010：14'-15']

8．私信・新聞・ウェブサイトの情報

私信についてはカッコを添えてその内に説明するか、注をつけて説明する。この情報を論文末の「参照文献」に再掲載することは不要。

【例】山田一郎によれば（著者への電子メール、2014年10月３日）、……

新聞やウェブサイトの情報（文書、映像など）については、オンラインの論文をはじめ、著作者名がある文書や著作者名に類する名称がある文書は一般に「参照文献」として取り上げることになる（付則２の１.⑥を参照）。ただし、周知性の高い新聞やウェブサイトの場合は、次の例のように、本文中にカッコに入れて略式の表示をしたり、注に入れたりすることも可とする。

【例】『毎日新聞』によれば……である（「来訪神が無形文化遺産へ――民俗行事への関心広がる」2018年11月４日首都圏版朝刊社会面）。

日本文化人類学会はその学会誌について……と述べている（「『文化人類学』とは」http://www.jasca.org/ 2019年８月１日閲覧）。

9．基本ルールの形では参照困難な場合

引用文献を上記の基本ルールの範囲内で引用することが難しい場合は、注をつけてそこに参照方法を記入することもできる。この形式で参照した文献は、重要文献である場合を除き、論文末の「参照文献」に再掲載する必要はない。

（2019年12月14日理事会承認）

執筆細則付則２――「参照文献」における文献表記の方法

1．「参照文献」全体の共通ルール

①参照文献概要

論文末に、本文と注で［著者名 西暦］等の形で引用した文献全体を掲げ、この部分の見出しを「参照文献」とする（「参考文献」、「引用文献」等は不可）。

ここで掲げる文献には、印刷された文書のみならず、手稿、電子文書、絵画・写真・動画映像、ソフトウェア等、様々な媒体のものを含む。

②記載方法

参照文献は、原則として、五十音順に並べる文献（以下、「五十音順リスト」と呼ぶ）、ラテン文字アルファベットの順に並べる文献（以下では便宜上「アルファベット順リスト」と呼ぶ）の二つの文献群に分け、各々の仕方で整理した上で、五十音順リスト、アルファベット順リストで記載する。二つの文献群に区分名をつける必要はなく、また両者の間を行アケする必要もない。なお、文献総数が少ない場合や、漢字・カナ等の文献が少ない場合は、全体をアルファベット順でまとめてもよい。

各文献の書誌情報を記載するにあたり、２行目以降は全角１文字分、字下げした形にする。なお、字下げはWord文書のインデントマーカーを使うのがよい（テンプレート中の説明を参照のこと）。

なお、漢字・カナ表記、アルファベット表記以外の仕方で書かれた文献に関しては、それをどちらのリストに入れるかは著者の判断に委ねる。当該言語に関する慣習を考慮しつつ、本誌のルールになるべく近づけた形で記載すること。

③文字・句読点・記号

「参照文献」では本文とは異なり、句読点として「。」「、」は用いない。五十音順リストでも、アルファベット順リストと同様、半角のコンマ、ピリオドを用いる。「参照文献」において全角を用いるのは、全角文字（漢字、カナ等）と全角カギカッコ（「 」と『 』）のみである。

語句の間は原則として半角アケするが、五十音順の文献リストで、「 」と『 』が使われる部分の前後では、カギカッコによって十分な空白部分が確保されているため、半角アケは省略する。

同一著者の文献を複数引用する場合、２件目以下では著者名は繰り返さず、全角ダッシュ３文字（―――）で代用する。なお、五十音順リストの場合は「―――」のみ、アルファベット順リストの場合はピリオドをつけて「―――.」とする。また、並べかたは西暦（刊行年等）の昇順とし、同年の場合はa, b, cを付して区別する。

【例】山口昌男 1975『文化と両義性』岩波書店.

――― 2007a『道化の民俗学』岩波書店.

――― 2007b『いじめの記号論』岩波書店.

Geertz, C. 1973. *The Interpretation of Cultures: Selected Essays*. Basic Books.

―――. 1988. *Works and Lives: The Anthropologist as Author*. Stanford University Press.

④著者等の氏名について

漢字表記の名前の場合は、姓と名は区切らずに続ける。それ以外の場合は、一般的には、姓とそれ以外の名を〈半角コンマ＋半角アケ〉で区切り、後者は「イニシャル.」（「.」は半角ピリオド）の形とする（例の１番目）。なお、名前を略さない形（例の２番目）も可とするが、その場合は論文内で首尾一貫性を保持する

こと。

【例】サーリンズ，M. 1993（1985）『歴史の島々』山本真鳥訳 法政大学出版局.（Sahlins, M. *Islands of History*. University of Chicago Press.）

サーリンズ，マーシャル 1993（1985）『歴史の島々』山本真鳥訳 法政大学出版局.（Sahlins, Marshall. *Islands of History*. University of Chicago Press.）

⑤原書刊行年を付記する場合

引用する書籍が再版、改版等であるため、初版の刊行年を添えるべき場合は、それをカッコして添える。初版等の書誌情報等の詳細は省略可（必要がある場合は、邦訳書の原書表記と同様、追記の形で半角カッコの中に書く）。

【例】Malinowski, B. 2014（1922）. *Argonauts of the Western Pacific: An Account of Native Enterprise and Adventure in the Archipelagoes of Melanesian New Guinea*. Routledge.

⑥未刊行文書・電子書籍・オンライン文書・映像等について

未刊行文書、電子文書（オンラインも含む）、映像など、出版物でなくても著作物性の高い文献は原則としては出版物と同様に扱い、著作者名に日付（刊行年、公開年、制作年等）を加えて「参照文献」のしかるべき位置に配置する。

著作者が不明であるが、著作者名に類する名称（発行者名、制作団体名、アーカイブ名等）が存在する場合には、その名称を用いる。書誌情報としては、タイトルのほか、文書の状態（例えば未刊行論文）、媒体、アクセス方法など、各々の資料にとって必要十分な書誌情報を記すこと。日付に関する情報が不在の場合は、刊行年のところは「日付不詳」（日本語文献の場合）、「n.d.」（英語文献の場合）等とする。

電子書籍（Amazon Kindle版など）を参照している場合も「参照文献」に含めることになるが、紙媒体でも刊行されている場合は、読者の便宜のため引用に際しては紙媒体のページを表示することが望ましい。しかし、それが容易でない場合には、以下の３番目の例のように、代替的な参照方法を「参照文献」の当該書誌に追記した上で引用することも可とする。

【例】Smith, J. n.d. Education and Reproduction among Turkish Families in Sydney. Unpublished MS. Department of Education, University of Sydney.

ルーシュ，J. 2006『人間ピラミッド』紀伊国屋書店．DVD.

Okely, J. 2013 *Anthropological Practice: Fieldwork and the Ethno-graphic Method*. Berg.（引用はAmazon Kindle版位置番号で示す）

紙媒体が存在しないオンライン文書（映像等も含む）の場合はURLを記すこと。オンライン学術雑誌のように安定したウェブサイトの場合は閲覧日の付記は不要。ページの更新や削除の可能性がある場合は閲覧日を付記すること。

付言すれば、「執筆細則付則１――文中における引用表示の方法」の８.で述べた通り、著作者性に関する情報が表示しにくいオンラインの情報については、「参照文献」には含めず、本文中にURLを組み込むか、注をつけてURLをその中に記載するとともに、閲覧した日付を付記すること。また、新聞の電子版など周知性の高いオンラインの情報も、本文中または注に組み込むことができる。

【例】Nader, L. 2011. Ethnography as Theory. *HAU: Journal of the Ethnographic Theory* 1（1）：211-9. https://www.haujournal.org/

日本文化人類学会 日付不詳「『文化人類学』とは」http://www.jasca.org/ 2019年８月１日閲覧.

Macfarlane, A. 2010. An Interview of the Anthropologist Sir Edmund Leach. https://www.youtube.com/wath?v＝3hnj0wiFPqk オンライン映像．2019年８月１日閲覧.

⑦DOIについて

DOI（Digital Object Identifier）の付いた文書については、可能であれば末尾にそれを付記するとよい。DOIをつけるとJ-Stageにアップロードされた際に自動的にリンクが張られ、引用文献・被引用文献等のネットワークの中に入るという利点がある。

【例】Mol, A. & J. Law 1994. Regions, Networks and Fluids: Anemia and Social Topology. *Social Studies of Science* 24（4）：641-71. DOI: https://doi.org/10.1177/030631279402400402.

２．五十音順リストの場合

①一般的原則

五十音順リストについては、次の４点が一般的原則となる。

（ｉ）語句の区切りでは半角アケするが、全角のカギカッコ等の前後は半角アケしない（全角のカギカッコの前後はスペースが十分にあるため）。

（ii）コンマ、ピリオドはすべて半角とする。（後続の語句がある時は半角アケするが、全角カギカッコ等の場合は、上記（ｉ）に従い半角アケしない。）

（iii）人名の姓と名は切り離さない。

（iv）書名・雑誌名は『 』で囲み、論文名・記事名は「 」で囲む。

なお、本節の説明文では「半角アケ」を便宜的にアステリスク（＊）で表示する。実際には一連の例の通り、＊を「半角アケ」に読み替えること。

②単著・共著・編著

〈著者名＊刊行年『書名』出版社名.〉を基本形とし、必要に応じてより詳しい書誌情報を付け加える。その場合①の一般的原則に従うこと。

編者については「編」をカッコに入れずに付記すること。著者・編者が３名以内の場合は、中黒でつないで全員の氏名を記載すること。著者・編者が４名以上の場合は、筆頭著者名等を掲げて「ほか」を付けることができる（筆頭著者名は複数でも可）。

【例】田中雅一・松田素二編 2006『ミクロ人類学の実践――エイジェンシー／ネットワーク／身体』世界思想社.

小松和彦ほか編 2004『文化人類学文献事典』弘文堂.

③邦訳書に関連する一連のルール

邦訳書では『書名』のあとに〈翻訳者名＊出版社名.〉を挿入すること。監訳者がいる場合は訳者を省略してもよい。

【例】サーリンズ, M. 1993『歴史の島々』山本真鳥訳 法政大学出版局.

ヘルマン, C. G. 2018『ヘルマン医療人類学――文化・健康・病い』辻内琢也監訳責任 金剛出版.

原書を併記する場合、例にあるとおり、邦訳書刊行年の後に〈＊（原書刊行年)〉を挿入し、最後に原書に関する書誌情報を追記する（表記法はアルファベット順リストに関する説明を参考にする)、という形になる。原書刊行年・原書書誌情報を囲むカッコは半角カッコとする。

【例】サーリンズ, M. 1993（1985)『歴史の島々』山本真鳥訳 法政大学出版局.（Sahlins, M. *Islands of History*. University of Chicago Press.）

なお、下の例のように原書を参照して邦訳書を半角カッコに入れることもできる（この場合はアルファベット順リストに含める)。邦訳書と原書の両方に直接言及したい場合は各々を「参照文献」に含めたうえで引用すること。

【例】Sahlins, M. 1985（1993）*Islands of History*. University of Chicago Press.（サーリンズ, M.『歴史の島々』山本真鳥訳 法政大学出版局.）

邦訳書で著者ないし編者が複数の場合、２番目以降の著者はイニシャルが姓の前にくる形にするとともに、最後の２人の著者を〈＊&＊〉でつなぐ(&は半角)。また、３人以上の場合、最後の２名の著者を除き、著者名のあとに半角コンマを加えて名前を区切る（２番目の例)。

【例】ドゥルーズ, G. & F. ガタリ 1994『千のプラトー――資本主義と分裂病』宇野邦一ほか訳 河出書房新社.

セリグマン, M. E. P., E. F. ウォーカー & D. L. ローゼンハン 2016『異常心理学大事典』原著第４版 上里一郎・瀬戸正弘・三浦正江監訳 西村書店.

④論文集に掲載されている論文

〈著者名＊刊行年「論題」＊編者名『書名』出版社名＊ページ.〉を基本形とする。①の一般的原則に従った書き方だが、編者名の直前（論文の情報と書籍の情報の区切りとなる場所）およびページの前だけは半角アケしている点に注意。ページ表示はp.ないしpp.を用い、半角アケする。

【例】蒲生正男 1959「奄美の民俗――社会」大間知篤三ほか編『日本民俗学大系 第12巻 奄美・沖縄の民俗』平凡社 pp. 7 –21.

邦訳書の場合は上記のルールに③の邦訳書に関するルールを組み合わせる。

【例】クリフォード, J. 1986「序論――部分的真実」 J. クリフォード & G.マーカス編『文化を書く』春日直樹ほか訳 紀伊國屋書店 pp. 1 –50.

⑤雑誌論文

〈著者名＊刊行年「論文名」『誌名』巻（号)：＊ページ.〉を基本形とする。雑誌の巻（号）とページは半角コロンで区切り、巻・号・p.・pp.等は省略する。

【例】馬淵東一 1935「高砂族の系譜」『民族學研究』1（1)： 1 –16.

書評文については、もし書評文自体の論題がない場合は、刊行年の後に、書評対象の書籍名を用い、〈＊書評「著者名『書名』」〉を書評文のタイトルとする。

【例】石井溥 2018 書評「田中二郎『アフリカ文化探検――半世紀の歴史から未来へ』」『文化人類学』83（1)： 120– 2 .

⑥新聞・一般向け雑誌の記事等

雑誌論文に準ずるが、以下の通り資料の性質に即した扱いが必要になる。

（ⅰ）非署名記事の場合、また署名記事でも発行者名を挙げた方が良いと判断される場合は、発行者名を著者とする。

（ⅱ）全国紙などで出版地により紙面が異なる場合は、出版地も付記する。

（ⅲ）掲載ページより掲載セクションを書いた方が良い場合（新聞電子版を参照した場合も含め)、そちらを記載する。なくても構わない。

（ⅳ）一般向け雑誌で一般には月刊号、週刊号等とし

て通用している場合（巻号がつけられている場合も含め）、通用している方の表記を用いる。

下に新聞と雑誌の例を挙げるが、それぞれの場合に応じて必要十分な情報を示すこと。

【例】毎日新聞 2018「来訪神が無形文化遺産へ――民俗行事への関心広がる」11月４日首都圏版朝刊社会面.

インゴルド, T. 2017「大地、空、風、そして天候」古川不可知訳『現代思想』３月臨時増刊「人類学の時代」pp.170-91.

なお、周知性の高い新聞等の場合は本文または注の中に情報を盛り込むこともできる（付則１の８. を参照）。

他方、一定数以上の記事を引用しているため、上記のような引用方法が使いにくい場合には、「参照文献」のところに他の文献とは分けて独立の小見出しをつけ、適切と思われる方法で並べてもよい（下の４. の説明も参照のこと）。

３．アルファベット順リストの場合

①一般的原則

アルファベット順リストについては、次の５点が一般的原則となる。

（ｉ）すべて半角文字を用い、後続の語句がある場合は、コンマ、ピリオド、コロン、セミコロンのあと半角スペースを入れる。

（ii）書名･雑誌名はイタリック体にする。サブタイトルがある場合は半角コロンと半角スペースのあと、再び大文字で始める。

（iii）論文名･記事名は前後に何もつけずにそのまま書き、ピリオドで区切る。

（iv）人名については、姓の後にコンマを振り、名はイニシャル＋ピリオド（.）を用いる形を標準とする。なお、共著・共編著の文献の場合、２番目以降は姓とその他の部分の順が逆になる。

（ｖ）英語文献の場合、冒頭の文字、また冠詞・前置詞・接続詞以外の語頭を大文字にする。なお、雑誌名の冒頭にTheがある場合は省略してよい。

なお、下記の一連のルールの説明や例では、使用頻度の最も高い英語文献を主に念頭に置いている。記載したい文献に関して英語文献とは異なる慣習がある場合には、可能な範囲で本項目の表記法を考慮しつつ、著者自身が適切な方法を選んで構わない。

【例】Lévi-Strauss, C. 1967. *Les structures élémentaires de la parenté*. 2e éd. Mouton.

※フランス語文献ではタイトル冒頭部分と固有名詞以外は大文字にしない。なおフランス語の場合、この例での２語目のsを大文字にする表記法もある。いずれにせよ論文内で首尾一貫したルールを用いること。

②単著・共著・編著

①の一般的原則に従って、著者名、刊行年、書名、出版社をピリオドで区切りながら書く。出版社名については、名称の一部の自明な部分（PressやPublishersやBooks等）は省略できるが（下の１番目の例を参照）、大学出版局の場合（２番目の例）や省略すると分かりにくい場合（３番目の例）は省略しない。

【例】Moeran, B. 2006. *Ethnography at Work*. Berg.

Gell, A. 1998. *Art and Agency: An Anthropological Theory*. Oxford University Press.

Geertz, C. 1973. *The Interpretation of Cultures*. Basic Books.

編者名には（ed）、複数の編者には（eds）を用いる（ピリオドは不要とする）。

著者・編者が複数の場合、２人目以降はイニシャルを姓の順序を入れ替え、最後の著者名の前を＆でつなぐ。著者が３名以上の場合、最後の２名の前まで、コンマを使って区切る。

【例】Parry, J. ＆ M. Bloch（eds）1989. *Money and the Morality of Exchange*. Cambridge University Press.

Dolgin, J. L., D. S. Kemnitzer ＆ D. M. Schneider（eds）1977. *Symbolic Anthropology: A Reader in the Study of Symbols and Meanings*. Columbia University Press.

著者・編者が４名以上の場合は、et al を用い（ピリオドは不要とする）、筆頭著者・編者（複数も可）以外を省略することができる。

【例】Tsing, A. et al（eds）2017. *Arts of Living on a Damaged Planet: Ghosts and Monsters of the Anthropocene*. University of Minnesota Press.

③翻訳書

翻訳書の場合（以下、英訳書の場合）は、書名のあと、ピリオドなしに（trans）と書いて訳者名を加える。できれば、２番目の例に従い、原書（ないし翻訳書が参考にした版）の刊行年、および書名・出版社名を（ ）を使って併記する。

【例】Godelier, M. 2011. *The Metamorphoses of Kinship*（trans）N. Scott. Verso.

Godelier, M. 2011（2004）. *The Metamorphoses of Kinship*（trans）N. Scott. Verso.（*Métamorphoses de la parenté*. Fayard.）

④論文集に掲載されている論文

著者名に続けて、〈刊行年.〉、〈論文タイトル.〉、〈In〉をそれぞれ半角アケしながら書き、そのあと②の編著の形式に従って書誌情報を書く。ただし、書名

の終わりの部分でピリオドの代わりにコンマを振り、〈pp.＋半角アケ〉のあとページを記載する。

【例】Mead, M. 1955. Children and Ritual in Bali. In M. Mead & M. Wolfenstein（eds）*Childhood in Contemporary Cultures*, pp. 40–51. University of Chicago Press.

⑤雑誌論文

①の一般的規則に従い、著者名に続けて、〈刊行年.〉、〈論文タイトル.〉、〈雑誌名（イタリック体）〉、〈巻（号）:〉、〈ページ.〉をそれぞれ半角アケしながら書く。vol.やno.やpp.は省略してよい。

【例】Mol, A. & J. Law 1994. Regions, Networks and Fluids: Anemia and Social Topology. *Social Studies of Science* 24（4）: 641–71.

書評文については次の例を参考にして書くこと。

【例】Chao, S. 2019. Review of *Palma Africana* by Michael Taussig. *American Anthropologist* 121（3）: 784–5.

⑥新聞・一般向け雑誌の記事等

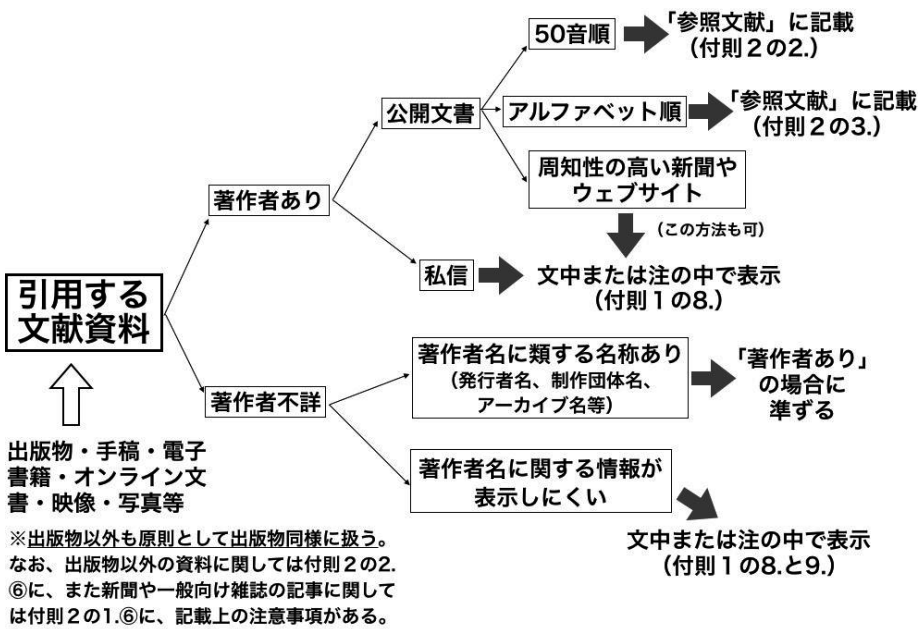
五十音順リストの場合（上記の１.⑥）を参考に、アルファベット順リストの一般的原則に従いながら適切な記載方法を用いること。

４．判断に迷った時のためのフローチャート

迷った場合は下のフローチャート（特殊な場合を除く）を参考のこと。

なお、本文書が一連のルールを定めているのは、『文化人類学』に学術雑誌としての全体的な統一性を与えるためであり、投稿者はできる限りこれに従うことが求められる（ただし、付則２の３.①で明示的に述べている通り、英語圏以外の文献については上記の一連の事例とは異なる表記法が可能）。目安として言えば、使用頻度の高いルールは遵守すべき度合いがより高いことになる。

とはいえ、学問的内容の正確な表現が『文化人類学』にとって最重要事項であることはいうまでもない。本文書のルールは、著者が学問的理由から熟慮の末にやむなく「ルール違反」を採用する可能性を排除するものではない。大きな「ルール違反」の場合には、その学問的理由をカバーレターで説明するのが望ましい（なお、査読の過程で編集委員会が別の方法を提案する可能性もある）。



（2019年12月14日理事会承認）